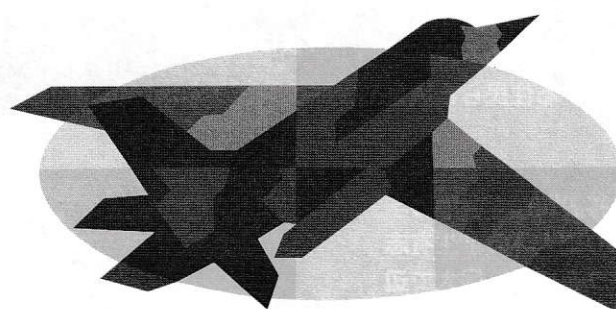


■おきなわ環境ネット■

沖縄環境ネットワーク通信 29号

Whose is this sky?



特集 辺野古／沖縄から世界に向けた闘いの日々

これまでの動き

ある日、辺野古の海にて～座り込み現場レポート～

シンさんの辺野古日記から

インタビュー「辺野古倶楽部」

ジュゴンシンポジウムと「ジュゴン訴訟」報告

恩納村 PCB 処理施設建設問題・その後

コストリカツアー日誌（最終回）

… 真喜志 好一

… 仲西 美佐子

… 内海 正三

《環境情報おきなわ》

特集 辺野古～沖縄から世界へ向けた闘いの日々

沖縄県名護市辺野古。在沖米軍キャンプ・シュワブの所在地として知られていたこの地に、海上ヘリポート計画が持ち上がってからすでに10年近い時間が流れた。

この間、「ヘリポート」計画は「軍民供用の海上基地」計画へと変貌を遂げ、昨年4月からは那覇防衛施設局の調査が開始された。そしてそれに反対する市民が現場にテントを張って座りこみを始めてからまもなく一年が経過する。辺野古をめぐる状況が刻々と変化する中、建設側はボーリング調査の強行を図る姿勢を崩していない。今回はその辺野古の「いま」と「これから」を特集する。

辺野古 これまでの動き

2004.12.2 米軍普天間飛行場の代替施設建設に伴う名護市辺野古沖のボーリング調査について、反対派住民を支援する弁護団は二日までに、調査の差し止めを求める訴えを起す方針を確認。辺野古の現地で反対する住民らと調整した上で早ければ年内にも提訴の意向。

12.3 普天間飛行場代替施設の辺野古移設問題を県内の学生など多くの人に考えてもらおうと、沖縄大学の学生有志が「辺野古倶楽部」と銘打ったグループを発足。同大で辺野古のビデオ上映会を行い正式に結成する。座り込みへの参加や新聞投書、メールでの情報発信など「それぞれができることから取組む」という。

12.8 ボーリング調査現場で単管足場の設置作業を阻止しようとした50代女性が作業船に転落、頭などに打撲傷。女性は「足場にしがみついた手ははずされた」と主張。第11管区海上保安本部が施設局の作業員、反対派の双方から事情聴取。同調査の阻止行動での負傷者は初めて。

12.13 辺野古沖ボーリング調査反対で反対運動に新たに国頭、宜野座、金武の3漁協の漁船9隻が抗議船として海上の反対行動に加わる。これで抗議船は漁民らの船を合わせ13隻。

12.14 米国防副次官補としてSACO（日米特別行動委員会）最終報告の作成作業に携わったカート・キャンベル米戦略国際研究センター上席副代表が講演のために来沖、SACO合意による普天間飛行場代替施設の名護市辺野古沖への建設について「過去には意味があったが今は暗礁に乗り上げている。他の選択肢を考える時期だ。新しい視点が必要だ」と述べ、移設作業の見直しを求める。

12.15 多くの住民と漁民が参加して辺野古沖での海上デモ実施。漁港での集会に参加した市民らは「市民の意思は建設反対」と民意を覆した建設受け入れの撤回を要求。集会にはエイサーを披露した大学生らをはじめ、市内外、県外からも多数が参加。

12.20 那覇防衛施設局、現場海域の計30数ヶ所でサンゴや岩礁を損傷したと発表。同施設局は「破損は足場の底板（縦、横2メートル）が接触したことによるもの」として、今後は底板を外して設置作業を進める方針。

2005.1.5 年末年始に中断していた名護市辺野古沖での阻止行動を再開。那覇防衛施設局は先月までに「五日以降に海上作業を開始する」と説明、同日午前11時に警戒船一隻を出したが、掘削など目立った作業は行っていない。

1.6 那覇防衛施設局、作業船7隻を辺野古漁港から出港させ、昨年12月23日以降中断していた海上作業を再開。調査に反対する住民、市民団体側は抗議船4隻を出し、沖合にあるボーリング調査の単管足場に人員を配置するなど調査阻止の態勢を組み、緊張感に包まれる。

1.7 「沖縄ジュゴン環境アセスメント監視団」と「ジュゴンネットワーク沖縄」、県漁業調整規則に違反してサンゴを破壊されたなどとして、事業者の那覇防衛施設局と調査会社（本社・東京）に対する告発状を那覇地検に提出。

1.12 那覇防衛施設局、水深四メートル以上の海底を掘削する「スパット台船」を名護市辺野古沖へ搬送。リーフ外の掘削ポイントに台船を設置する見込み。施設局が掘削に向けた作業を本格化させたことに、基地建設に反対する市民団体は、早朝から抗議船を繰り出し阻止行動を展開。スパット台船は昨年12月の台風接近に伴い、水深25メートル以上を掘削する「固定ブイやぐら」を積んだ台船とともに辺野古沖から一時撤去され、中城湾港などの荷さばき地に陸揚げされていた。辺野古沖には43日ぶりの搬入。

1.14 市民や近隣海域の漁業者ら県内の68人が国を相手にボーリング調査の差し止めを求めた訴訟で、那覇地裁（木稔裁判長）は第一回口頭弁論を3月1日午前11時から開くことを決定。

1.20 サバニを引いて辺野古への海上基地移設反対を訴える平和行進「ROAD OF THE PIECE」が午前11時に辺野古漁港を出発。23日午後2時ごろ、糸満市の平和祈念公園に到着予定。

1.24 ジュゴンの研究で世界的に有名なアメリカのエレン・ハインズ博士が来沖。国際自然保護協会などの勧告に基づいてジュゴンの住む辺野古の海の環境を基地建設という形で変化させないよう県に求める。

1.29 ジュゴンの生息環境をどう守るかを考える「ジュゴンシンポジウム」が名護市で開かれる。サンフランシスコ州立大学助教授のエレン・ハインズ博士を講師に、住民主体の実効性ある保護計画づくりを模索。シンポを主催したジュゴン保護基金委員会から、自然保護管理の自主ルールを盛り込み、県知事へ保護区設定を求める宣言案を提案。

2.2 米軍普天間飛行場代替施設建設に向けた名護市辺野古沖のボーリング調査に対する差し止め訴訟で、宜野座村、石川市、金武町、東村の漁民約20人を原告とする新たな訴えが起こされる。同訴訟弁護団は今週中に漁民らの委任状をとりまとめ、来週中にも提訴する方針。

2.7 政府、1999年に閣議決定した同県名護市沖への移設計画の見直しを、今後の在日米軍再編協議の議題として取り上げる方向で検討に。

2.9 国際環境保護団体「グリーンピース・ジャパン」、米軍普天間飛行場代替施設の名護市辺野古沖建設に反対し、抗議活動が続ける辺野古住民や市民団体の活動に本格的に参加・協力すると発表。同団体は、今月初めにすでにスタッフ一人を現地派遣しており、地元住民らとともに海上の足場などに座り込むなど、ボーリング調査の阻止行動を展開する。

2.13 ボーリング調査の「座り込み阻止行動三百日集会」が辺野古で開かれる。約三百五十人が参加。

2.16 沖縄の環境問題に関するドキュメンタリー番組を制作し、英BBCテレビでの放送を目指す市民団体「普天間～辺野古アクション・ネットワーク（FHAN）」（代表・ピーター・シンプソン沖縄国際大講師）のメンバーが県庁で記者会見し、制作資金への募金協力を呼びかけ。FHANは県内の大学や高校の教員、学生らで昨年末に発足。BBCで週1回放送されている環境番組「アース・リポート」（約30分）で、米軍普天間飛行場の辺野古沖移設問題を中心とした沖縄の自然環境をめぐるドキュメンタリー番組を放送してもらう企画に取り組んでいる。BBC側と交渉してきたシンプソン代表によると、担当ディレクターからは番組制作で既に内諾を得ており、制作資金が集まれば今年10月までには県内での撮影を始める意向という。放送日などは未定。

2.19 辺野古漁港、二月下旬から三月末にかけて浚渫工事で市民団体側が漁港を使用できなくなる可能性。使用禁止になれば、市民団体の抗議行動へ影響が出るとみられる。

2.24 米政府、在日米軍再編に伴う普天間飛行場の名護市

辺野古沖への移設について、日本側から代替案の提示があれば見直し協議に応じるとの方針を決定。

2.25 大野防衛庁長官、米軍普天間飛行場の名護市辺野古沖への移設計画を見直す可能性について「（米側と）話し合う中で、日米特別行動委員会（SACO）最終報告と米軍の再編との接点がある可能性を完全には否定しない」と述べ、今後の米軍再編協議の中で議論の対象になり得るとの認識を示す。

3.1 ボーリング調査に反対する市民や近隣海域の漁業者ら県内の68人が、国を相手にボーリング調査の差し止めを求めた訴訟の第一回口頭弁論、那覇地裁で開かれる。原告側は漁業者ら3人が自然環境の破壊などを理由に差し止めの必要性を意見陳述し、基地建設計画そのものの不当性などを主張。国側は「主張自体が失当」と請求を棄却するよう求めた。

3.3 辺野古沖に生息する国の天然記念物ジュゴンの保護を日米の自然保護団体が求めた訴訟で、サンフランシスコの米連邦地裁は、被告の米国防総省とラムズフェルド長官から出されていた訴え却下の申し立てを退けた。今後、判決に向けて審理が進むとみられる。自然保護団体側は、計画は米文化財保護法（NHPA）に違反するとして提訴。国防総省側は、同法の適用対象は建造物などの文化財に限られるとして訴えの却下を求めている。

3.11 大野防衛庁長官は十一日午前の閣議後会見で、米軍普天間飛行場の名護市辺野古沖移設について、「現地から代替案が出てくれば、実現可能か真正面から検討したい」と述べ、沖縄側から移設先に関する提案があれば再検討する考えを示した。大野長官が普天間飛行場の移設問題で、代替案を検討する姿勢を明確にしたのは初めて。

3.17 小泉首相、沖縄県の米軍普天間飛行場の移設問題で、計画の見直しについて、米側と協議する考えを初めて示す。

4.1 米軍普天間飛行場代替施設建設に伴う名護市辺野古沖のボーリング地質調査で、県は調査期間更新への同意書を那覇防衛施設局に提出。更新期間は4月7日から一年間。県の同意を受け、施設局は本年度もボーリング調査の継続が可能に。同調査の期間更新については、辺野古移設に反対する市民団体などが「小泉純一郎首相自らが辺野古移設計画の見直しに言及するなど計画の前提が崩れている」「ボーリング調査はサンゴ破壊を引き起こしている」などとして県に同意しないよう求めている。

4.19 沖縄・名護市・辺野古の海上基地建設阻止運動、この日で開始から一年。

ある日、辺野古の海にて ～座り込み現場レポート～

酒井 哲哉（編集部）



海に出ようと思った。とにかく海に出て実際に現場を見てみなくてはわからないことがあるはずだ。そう思いながら、3月18日の朝、辺野古へと車を走らせた。

これまで海上基地建設予定現場の辺野古には何度も足を運んでいるが、それはあくまで座り込みのテントまでであって、単管足場（業者が工事のために設置した調査用の足場）は海の上にある。本当の「現場」とは実はこの足場周辺のことなのである。ここで作業をする側の那覇防衛施設局と業者、それに反対する人々たちの攻防が続いている。訪ねた日の前々日の3月16日には、朝6時30分という非常識な時間に業者が作業を開始しようとして、反対する人達との間に争道が起こったばかりだ。現場の緊張感が高くなっていることは想像に難くない。

午前10時、テントに辺野古漁港に到着。すでにテントには10数人が座り込みを始めていた。平和市民連絡会の事務局長で、このテントのとりまとめ役でもある当山さんに挨拶をして、沖に出ることは可能かどうか尋ねる。11時半ごろに、足場にいる人たちに昼食を届けに行くので、それに同乗できるとのこと、それまでテントで待機する。天気は曇りで悪くないが、風がやや強い。リーフの波も少し高そうだ。

時間が近づいたので、着替えを持って乗り場まで行こうと立ち上がると、当山さんが「荷物は持っていないでね」と言う。一瞬、不安が頭をよぎるが、指示に従って荷物はテントに置いていく。

乗船するのはグリーンピースから提供されたゴムボート。3人乗ればいっぱいという小さなものだ。設置されている足場は第一ポイントから第五ポイントまでである（うち第四ポイントは今年の台風の際に撤去されていて

いまはない）。それぞれのポイントに持っていく弁当の数を確認して積み込んでから、2人の女性クルーとともに海に出る。最初はさほどでもなかった波が、沖に出るとともに激しくなる。リーフの内側とはいえ、風が強いため波は高い。クルーがウエットスーツを着けているわけがよくわかった。

ポイントが近づくにしたがって、波はますます激しくなり、そのうち飛沫をモロにかぶることになってしまった。小さなゴムボートは遠慮なく激しく揺れ、そのたびにこっちは波をかぶる。

最初に最も沖合いにある第三ポイントに到着するが、波と風でゴムボートを足場に着けることさえままならない。足場に乗って待機しているメンバーにロープを投げ、それを引っ張ってもらってようやく横づけ。何とか昼食を手渡す。



乗船したゴムボート

次に私が降りることになっている第二ポイントへ。やはり波は高く、もうすでに上半身はびしょぬれ状態だ。このままだと確実に風邪を引くな、などと考えつつ、第二ポイントに近づく。「最初から足場に上がるのは難しいので、まず船で待機して」との当山さんの指示に従って、足場のすぐわきに停泊している「ナイワイ7世号」（作家の灰谷健次郎氏が提供してくれた船）に乗り込む。

すでに船上には3人の方たちが乗り込んでいた。年配の女性が2人と40歳くらいの男性ひとりだ。そして操縦室には、国頭村の海人（ウミンチュ。漁師のこと）である山城善勝さんが舵を握っている。山城さんは61歳。もう40年もウミンチュをやっている。しかしどうみても40代くらいにしか見えない。好きなことをやっていると老けないという見本のような人だ。

ゴムボートでさんざん揺らされたので気分が悪い上に、濡れた体に海上の風が当たって寒い。こりゃあ本格的にまずいなと思いつつ、しかししばらくは陸に上がれないので覚悟を決めて、持参した弁当を食べる。弁当の包みも海水にひたっていた。

食べながら、先客の人たちと話をする。隣りに座っている女性は平良さん。失礼ながら結構ご高齢な方だ（あとで報告会があった際、沖縄ではよく知られている平良修牧師の連れ合いの方だとわかった）。昨年4月に座り込みが始まった直後からほぼ毎日、ここに来ているようだ。しかも沖縄市の自宅からである。単純に考えても片道1時間はかかるはずだ。テントに集合はいつも朝7時くらいのはずだから、その時間にはここに来ていることになる。単に基地に反対だというだけでここまでやれるものだろうか。驚嘆する。

しかし、平良さんはさも普通のことのようになんか話して下さる。毎日、朝から夕方近くまで足場で過ごすこと、相手の業者とはすっかり顔見知りになってしまったこと、いつも相手の若い作業員に「あなたたちが憎いのではない。あなたたちをここに来させている、私たちと向き合わせている、そんな人たちが憎いのだ」と言い続けていること。そんな話をたくさん聞かせて下さった。



第二ポイントの足場

足場に座る人たちは、思い思いの時間をこの海の上ですごしている。そしてこの人たちは、ひとたび業者が作業に入ろうとすると、ここから海に飛び込み、その身を呈して作業を阻止するのだ。足場と相手の間の狭い海に身を投げ出すことがどれほど危険なことか、想像に難くない。しかし、この人たちは淡々としている。

途中からウミンチュの善勝さんも話に加わって、いろんな武勇談を聞かせてくれる。無茶苦茶おかしい話が多くて、船上は爆笑に包まれる。ここが「闘いの場」だということを忘れてしまいそうになる。しかし、ここは間違いなくある種の戦場なのだ。

時々、善勝さんが双眼鏡で第一ポイントの方角を監視する。キャンプ・シュワブの海岸に最も近い第一ポイントは、最初に業者と対峙する場所だ。多くの場合、調査船はキャンプ・シュワブから出港するからだ。通常だと午後1時すぎに2つの業者の船が出港するらしいのだが、この日はその気配がない。業者側に雇われた監視船（地元ウミンチュたち）が魚港に帰り始めている。どうやら今日の作業は行われならしい。

午後2時、テントの本部から「今日は終了です。帰港してください」との無線連絡が入る。いつもよりずいぶん早い帰港らしい。個人的には相当寒くなってきたので、正直助かった。

帰りは「ナイワイ7世号」にそのまま乗っていったので、濡れることもなく無事帰港できた。テントに戻ると、出たときよりずいぶん人が増えている。しばらく休憩してから、毎日恒例となっている報告会が始まる。それぞれのポイントの担当者が今日の動きを報告したあと、質問や意見が出て、明日の予定を確認してから終了。

あたりを見回すと、すぐ近くに嘉陽宗儀さんが来られているのがわかった。私事になるが、9年前にこの海上基地（この時点では基地ではなく、「海上ヘリポート計画」であった）の話が浮上した際、いち早く地元辺野古で反対に立った人たちの中の一人が嘉陽さんだった。

当時、名護市で地域雑誌の編集の仕事をしていた私は、この問題の特集記事を書くため、何回か辺野古に通い、嘉陽さんにもインタビューしていた。地元では親しみを込めて「嘉陽のおじい」と呼ばれる嘉陽さんはその当時ですでに76歳。私の顔をまっすぐに見つめて、「私はもう長くない。でも、このヘリポートには残りの人生のすべてをかけて反対します。そうでないと、あの世に行ったときにご先祖さまに言い訳ができない」はっきとした口調で話された。そのときの強い印象が9年ぶりに蘇ってきた。

嘉陽さんにこのときのことを尋ねてみた。「申し訳ないが覚えていないですなあ」とのことだった。しかし、「覚えてないけれど、そのあなたがまたこうしてここに来てくれて、私と会うことができた。そのことが素晴らしいことです」とおっしゃられた。9年前と全く変わらない口調だった。

この人はこの9年間をここに捧げてきたのだ。そう思うと、涙が出そうになって困った。私がぼんやりと過ごしている間も、嘉陽さんだけでなく、こうして闘ってきた無数の人たちがいるのだ。

いつの間にか寒かった体が温かくなっていた。ここに基地なんかできるわけがない。そう確信した一日だった。

誰もこの海を壊せはしない

～「シンさんの辺野古日記」から～

辺野古での反対運動で、常に現場の最前線で動いている若者がいる。20歳の富田晋さんだ。富田さんは現場で体を張って調査の実施に反対しているだけでなく、その辺野古の毎日の動きを詳細に記録して、インターネットで公開している。

その日記から、最近の動きに関する記述を転載する。現場の緊迫して状況がよくわかると思う。

4月4日（月）

～今日の海上の様子～

・第一ヤグラ（パシフィックコンサルタンツ担当）

第一ヤグラは先週の段階でヤグラ自体が機材の重みに耐えられなくなりつつあり、ヤグラが傾いて来ています。防衛施設局はこれに対してヤグラの補強を安全上の理由としてこちらに強く要求してきていました。これに対して第一ヤグラの座り込みをしている人々、私達はヤグラの撤去を強く要求しています。

「安全とはこのヤグラの撤去、ボーリング調査の中止なのです。そして基地建設計画の白紙撤回です。」

防衛施設局は先週の木曜日には作業員を増員して第一ヤグラでの作業を強行しようとしてきましたが、第一ヤグラの阻止行動に20人以上も参加し、この強行を完全に阻止しています。

その結果、「7日間ヤグラの様子を点検をしながらみさせて欲しい」との交渉で落ち着き、とりあえず強行はありませんでした。しかしながら、いつも以上に作業員の言動も荒く、防衛施設局の職員はマイクを使って「立ち入り禁止です!」と叫んできたりと、強行しようとする姿勢は変わりありません。ヤグラが斜めに傾いている状況の中でも細心の注意をはらいながらヤグラに座り続けています。

今日の第一ヤグラには午後には10人以上が登り、今日も防衛施設局が作業を強行することはありませんでした。

「海中の状況の確認のためダイバーを一人潜らせて欲しい」との要求がありましたが、「こちらのダイバーも一緒に入って監視行動を行わなければなりません。今日はこちらのダイバーがいませんので後日にしていただきたい」と話しました。

・第二ヤグラ（サンコーコンサルタント担当）

第二ヤグラでは防衛施設局側から単管一本の交換を先週中に要求されていましたが、拒否しつづけています。

防衛施設局側が「ならば強行も考えざるを得ない」というような発言を行ったため、今日は第二ヤグラでも緊迫した状況がありました。

今日は強行はなく、ヤグラの寸法を測る作業と安全灯の点検だけが行われ今日は終わりました。

・第三ヤグラ（パシフィックコンサルタンツ担当）

第三ヤグラでは先週に約束していた単管一本の交換とクランプ（単管と単管の接合器具）2つの交換だけが行われ今日も進行作業を阻止しています。

・第五ヤグラ（サンコーコンサルタント担当）

第五ヤグラでは先週に約束していたクランプ一つの交換が行われました。それ以外では第二と同じく寸法を測り、安全灯の点検をしていきました。

県議会でボーリング調査に伴う1年間の延長予算が決議されてしまっています。「見直し」「県外移設」などの言葉を並べて基地建設に対する反発、阻止のガス抜きを行っている政府。でも私たちは決して騙されません。

現場は去年の9月と同じような緊迫感が戻って来ています。「1年間やりつづけなければならない」ではなく、今ボーリング調査を完全にとめるために私たちが何をするのか問われています。

4月5日（火）

スーパー固定ブイを積んだ作業台船が中城湾を出港！
現場が緊迫！

スーパー固定ブイをつんだ作業台船が中城湾を出港。午前9時15分「スーパー固定ブイを積んだ作業台船が中城湾港の岸壁を離れ外洋に出て行った」と情報が入り、現場が緊迫しました。すぐに体制を整え、来た場合に備えました。作業台船の動きが異常に早く、「チケン島沖合いに停泊」との情報が15分後には入っていました。

ヘリ基地反対協から那覇防衛施設局に「作業台船を出したのか」確認をしたところ「出した」と答えました。那覇防衛施設局は「スパット台船を動かした」と言いましたが、実際にはスーパー固定ブイを積んだ台船でした。「自衛隊の護衛艦が入港するために一時的にどいたのか」との問いに施設局は「そうではない。関係ない。」と答えています。那覇防衛施設局の口ぶりは「堂々と乗り込んでやる」といったようで突入してくることを予感させました。

作業台船はチケン島沖合いで停泊している状況が続いたため「ナイワイ7世号」が監視のために出港。アンカーを降ろしていることを確認しました。第二ヤグラには20人以上の人達が集まり、阻止船も10隻以上集まりました。

午後2時30分ナイワイ号が辺野古に戻ってきました。

「作業台船は前回来ていたもの（長さ約100メートル、横幅約40メートル）の1.5倍近くあるものです。馬力も2倍ほどあるようです。」との報告がありました。

ただその後、作業台船が中城湾に戻っていくのが確認され、午後4時には中城湾にいたことが確認されています。

今回は私たちの側は10隻以上の阻止船、20人以上の乗組員、各ヤグラには8人ほどの人がのぼり、ヤグラにも阻止船がついていました。

ナイワイ号が中城湾まで監視行動にいったことを含めて施設局側は今日の作業を諦めたのかもしれませんが。今回も海上保安庁の巡視船が多数出ていたようでしたから、突入の可能性は高かったと思います。明日も緊張した朝を迎えます。3月16日のスパット台船の強行作業の時は午前6時30分には作業を開始していました。そのこともあり、朝から気が抜けない状況が続くと考えています。

朝からが無理な人も声を掛け合って辺野古に集まってください。陸上、海上で座り込みをする人が必要です。自分がいけない方は知り合いや行ってくれそうな人達へと声をかけてください。

海上に必要なのは人の力です。人がいれば国は辺野古に手出しが出来ません。会場ではこれが明らかに出来ます。この基地建設が絶対に潰せるものだからこそ、今さらにその力が必要になってきています。

4月6日(水)

～今日の海上の様子～

昨日の段階でスーパー固定ブイを積んだ作業台船が動いているということがあり、現場の緊張は続いています。海上には40名以上の人が出て阻止行動を行いました。今まで辺野古に突入された中で最大級の作業台船はスピードも今までの中で一番速いと思われます。昨日は作業台船を突入させた際のアンカーを降ろす作業の練習だったと考えられます。突入は間近に迫っています。

第五ポイントで話をしていた年配の作業員の方は「俺たちの仕事は本来歓迎されて喜ばれるのになあ」と言っていました。本当にそうだと思います。作業員の方達はそういった仕事を通して誇りを持って仕事を愛してきたはずです。

私も一時期、測量の仕事をしていたことがあります。本来、ボーリングや測量といった仕事は人間が自分の生活場所をよくするために作った技術です。私たちが歩いている街道が真っ直ぐで平らなのはそういった仕事をしている人がいるからです。そしてこの仕事は決して自然を傷つけるためにあるものではありません。

国がこの辺野古に沖縄に基地建設を押し付け、沖縄にこんな仕事しか押し付けないことがこの状況を生み出しているということ。私はこの国を変えなければいけないと現場の作業員の方達に会う度に切に思います。

この国を変え、本当に誇りある仕事だけを出来る状況を取り戻す。そのために基地建設は絶対に止めなければなりません。

4月13日(水)

緊急報告 辺野古に集まってください

那覇防衛施設局が来週に「来週はボーリング調査を強行し、なんとしてでも海底に穴を開ける。今回は止めない。」と言明してきました。

今まで私たちの必死の阻止行動によって一切の作業を阻止されてきた防衛施設局がボーリング調査延長、阻止されてから1年間を契機に「基地建設計画断念」とまでささやかれ、追い込まれ、ついに突入を開始すると言っています。この1年間私たちは海上に一本のクイも打たせず、基地建設が進行することを全て阻止してきました。これから先もこの辺野古の海にクイ一本も打たせるわけにはいきません。

海上でヤグラに登って阻止行動に参加する人が必要です。リーフ内の4つのヤグラを人だけで作業を阻止するには少なくとも各ヤグラに15人以上必要です。そして今回は同時に外洋での作業台船突入ということはおおいにあり得ます。外洋での阻止行動も必要です。

前回、3月16日に防衛施設局はスパット台船を突入させる際に作業台船を夜に航行させ、午前6時には辺野古沖合いで作業を開始していました。私たちの必死の阻止行動によって作業台船、スパット台船は追い出されていますが、来週は出来るだけ早く集合し海上に出なければならなくなっています。

少なくとも前回の突入された際よりも速い時間帯で集合する必要があります。それぞれの許せる時間で出来る限り辺野古に集まってください。

辺野古阻止行動座り込みから1年、ここで絶対に負けるわけには行きません。

砂川という場所で軍事空港建設を止めた人達は「土地にクイが打たれても心にクイは打たれない」と語っています。そのとおりです。

その上でクイ一本も打たせない物質力が海上には必要です。来週は「命を守る会」が8年間作り上げてきた、阻止行動が1年間で作り上げてきた最大の力で防衛施設局の思惑を打ち砕きます。差別をなくし、戦争のない、基地建設もない世界を築くこと。私たちにはそれが出来ます。私は負けない。

「シンさんの辺野古日記」は以下のサイトで見る事ができます。

<http://diary5.cgiboy.com/2/henokonikki/>

インタビュー「辺野古倶楽部」

「これまでの動き」でも触れたように、昨年暮れ、沖縄大学の学生有志が「辺野古倶楽部」と銘打ったグループを発足させた。学生として辺野古の問題をとらえて発信しているというこのユニークな試みのメンバーである2人に話を聞いた。

「辺野古倶楽部」田丸 尚絵（沖縄大学研究生・写真左）

柳田 敏春（沖縄大学2年・写真右）



——メンバーはみんな沖大の学生ですか

「そうです。7人で始めました。去年の12月3日に辺野古のビデオの上映会をしたのが始まりです」

——誰が作ろうと言い出したの

柳田「誰がってことはないんだけど、実際にそれまで辺野古に行ったことのある学生が、やはりこの現状をもっと多くの学生に知ってもらいたいというのがあって、まず辺野古のビデオがあることは知ってたんで、その上映会をやろうと。できたらこれを県内の大学に回そうと考えたんですね。それでそのことを学長の桜井先生や他の先生に話したら、他の大学は思想的に難しいし、きちんと事務局のようなものを作らないといけないと言われて、まず沖大で足固めをしよう。

それまでは個別に辺野古に行っていたんだけど、学園祭のときに現場で中心になって活動している牧師の平良夏芽さんが講演に来られて、これを聞いてこれはまずい、何かしなくちゃと思って、行動を起こしたということです」

田丸「私はほかのメンバーと、10月に沖大であったアセスメント学会の全国大会の視察で辺野古に行って、それから具体的な動きをしようと考えはじめました」

——普段の連絡などはどのようにしてますか

田丸「一応メーリングリストを作っていて、登録している人にはシンさんの日記が常時送られてます」

——最初メンバーは7人だったということだけど、それから増えたのですか

柳田「学園祭のときに登録してもらった人は最大で30人くらいいたんですが、メール情報が中心だから携帯からではきちんと受信できない人もいて、知らないうちにはずれていった人も多いですね、いま実際にはそのときの半数くらいかな。でもその中にはすごく関心が高く、いろいろ参加してくれる人もいって、みんなが興味を持つきっかけにはなったかなと思っています。やっぱり那覇にいたらわからないですね。この現状は」

——海上デモのときに学生のエイサーが出てたけど…

柳田「あれも僕たちが連れていきました。置き台のエイサーの同好会です。その後に三線部も連れていきましたね」

——そのほかの活動は

田丸「通信を出しています。壁新聞みたいな形ですけど。昼休みに茶話会で集まったり、12月の上映会のあとで、その続編も上映しました」

——そもそも辺野古の動きに興味を持ったのはいつごろからですか

柳田「ボクが名古屋出身で、高校時代にある程度知識は入っていたんだけど、本当に関心を持ち始めたのは大学に入ってからですね。やっぱり夏芽さんの話を聞いたのが決定的でしたね」

田丸「もちろんずっと前から関心はあったけど、私は去年の9月に動きがちょっと急になって動員がかかったとき、知り合いと一緒に朝早く辺野古に行ったときからかな。ホントに真剣に考え出したのは。でも初めて辺野古に行ったのは中学校時代までさかのぼるんですよ。たぶん10年近く前。もう命を守る会は発足してて、いまの事務所になっている小屋ももう出来てました。ずいぶんさびれたところだなあってというのが最初の印象でした」

——辺野古で頑張ってる人たちを見てどんなことを感じましたか

柳田「その人たちが特別ということは思わなかったです。初めて行った日がほんとにひどい日で、特に工事している側の態度がひどかった。その光景を受け入れるのに時間がかりました。たぶん彼らもプレッシャーをかけられているんだろうと思います」

——これからの活動で具体的に考えてることは

田丸「もうすぐ新学期なんで、新しい学生も入ってくるし、これをきっかけにいろいろ動こうと考えています。他大学の学生も巻き込みたかったんだけど、政治的なからみもやっぱりあって、難しいですね。基本はすごいシンプルに『あの自然を守りたい』というスタンスでやってるんですけど、社会的な意味づけをされてしまうとちょっと、という感じです」

——サークル化しようという考えはない？

「それはないですね。ゆるやかに活動していきたいと思っています」
(聞き手／編集部)

ジュゴンシンポジウムと「ジュゴン訴訟」報告

真喜志 好一（沖縄環境ネットワーク世話人）

1月29日午後6時から、名護市瀬嵩で「ジュゴン保護基金委員会」の主催（沖縄環境ネットワークも協賛団体の一つ）で、サンフランシスコ州立大学のエレン・ハインズ博士を招いてシンポジウムが開かれた。土曜日の夕方ということもあって辺野古の現場からも集まり、総数100名を超える参加者。エレン博士は、ジュゴン保護区を作るうえで、「最も大事なことは地域住民の理解と参加だ」と強調し、ボーリング調査を阻止するために、海上の「単管やぐら」で座り込みを続ける住民の熱意が、ジュゴン保護区の設定に繋がることを示唆した。

せっかくのエレン博士の基調講演が、プレゼンテーションが英語で書かれたままだったので、参加者から「分かりづらかった」とおしかりを受け、主催側で日本語版を作る努力をするべきだったと反省。

日本自然保護協会理事の吉田正人さんは、辺野古の海草藻場の経年変化の調査を報告し、フィリピンのジュゴン保護区を視察してきたジュゴン保護基金事務局長の東恩納琢磨さんは、IUCN・国際自然保護連合の二度にわたるジュゴン保護勧告にも関わらず動こうとしない行政を当てにせず、自主的に「保護区」を宣言し自主ルールを作る素案を示した。ジュゴン保護区設定に向けて出発点になるシンポジウムであった。（琉球朝日放送「検証／動かぬ基地」のVol.35「フィリピンに学ぶジュゴン保護」をご覧ください。

<http://www.qab.co.jp/01nw/01usbase.html>



「ジュゴン訴訟」が「実質審理」にむかう

左のイラストは、「ジュゴン訴訟」提訴の直後にアジア

タイムスに掲載されたもので、アメリカのNGOがイラストの使用許可を新聞社から得てくれた。環境法律家連盟（とりわけ名古屋、大阪の弁護士さんらのご尽力）と米国の自然保護団体「生物多様性センター」ピーター・ガルビン氏とマルチェロ・モロ弁護士らの努力で「ジュゴン訴訟」を提訴していた。

入口論議の判決が3月2日に出て、ジュゴンの保護策について、アメリカの裁判所で実質審理に入ることになった。ジュゴンを先頭にして、「日本環境法律家連盟」、沖縄の3団体と3個人、米国側からは「生物多様性センター」など2団体が原告となり、ラムズフェルド国防長官と国防総省が被告である。米国の弁護士たちと環境保護団体に支えられての裁判である。

この訴訟は、米国の「国家歴史遺産保存法（NHPA）」に違反しているという訴訟である。NHPA法は、当事国の文化財

保護法で保護されている物事については、米国が国外で行う活動においても当事国の法律を遵守すべし、と規定しているという。ジュゴンは日本の文化財保護法で天然記念物に指定されているので、殺傷や生息環境を乱すことが禁じられている。

原告側は、辺野古海上基地計画について米国防総省がまとめた1997年9月29日付の「日本国沖縄における普天間海兵隊航空基地の移設のための国防総省の運用条件及び運用構想」（以下「97年OR」）全文を証拠として提出している。この文書には、ジュゴンの保護政策について何の記載もない。それで、NHPA法にしたがって、97年ORにジュゴンへの悪影響を回避するための方策を示せ、つまりは基地建設を断念せよ、と求める裁判である。

2003年12月9日付でラムズフェルド国防長官側からの答弁書が出た。大まかに二つの理由で辺野古の基地建設には米国政府は関与していないと主張している。理由の一つは、1972年までは米国が沖縄に基地を建設し使用してきたが、72年の沖縄の施政権返還後は日米地位協定に基づいて日本政府が基地を造り、それを米国に提供していること。もう一つは、日本政府が97年ORを無視して2002年7月に埋立計画を作ったという「不思議な」主張である。

2004年3月15日、裁判官・原告、被告双方の弁護士とで裁判の進行協議が行われ、①「国防総省の関与の有無について」を最初の争点とすることと日程が確認されている。5月17日に国防総省側は②「NHPA法と日本の文化財保護法は趣旨が違ふ」と主張をし、この①②が入り口論議の争点になった。8月4日、双方からのヒアリングが行われ、それから7ヶ月。待ちに待った入り口論議への判決であった。

沖縄タイムスは1面トップと社会面、琉球新報は社会面トップ。いずれも充実した内容の記事。マリリン・パテロ裁判官は、争点①について、1997年、2001年と2度にわたって国防総省が海上基地の構想をまとめているので、米政府の関与があることを認め、②についても「ジュゴンは沖縄県民にとって文化的、歴史的に重要なため、日本の文化財保護法で保護されている。歴史遺産の対象は文化によって異なり、NHPAがジュゴンに適用できないとする被告の主張は当たらない」と判断した。これから、海上基地建設がジュゴンの生息環境に与える影響について実質審理にはいることになる。

2003年3月に沖縄環境ネットワークが主催した「軍事活動と環境に関する国際ワークショップ」における、環境法律家連盟・事務局長の籠橋隆明弁護士、米国のNGO「生物多様性センター」のピーター・ガルビン氏、南山大学の目崎茂和教授によるセッションがこの訴訟のきっかけになった。関係者の努力に感謝しつつ報告する。

恩納村 PCB 処理施設建設問題・その後

仲西 美佐子（沖縄環境ネットワーク世話人）

1995 年に返還された在沖米軍恩納通信跡の下水処理槽から PCB（ポリ塩化ビニフェール）やカドミウム・水銀などの有害物質を含む汚泥が発見された。その後、那覇防衛施設局に引き継がれた米軍基地（恩納文屯基地）からも PCB を含む汚泥が発見された。恩納村には 322 トンもの汚泥が保管されている。

国は 2001 年のポリ塩化ビニフェール廃棄物の適正な処理に関する特別措置法を制定し、全国を数ブロックに分けて PCB の拠点的な広域処理施設を整備し、処理事業を行なうことにしている。中国・四国・九州・沖縄の処理のために九州事業として福岡県北九州市で処理事業が始まっている。しかし、PCB 処理は始まったばかりで濃度の濃い油の処理段階でしかない。恩納村にある PCB は汚泥なので、現在は処理できる状況にはない。

そんな中、恩納村に保管されている PCB の処理を急がなければならない理由は「大学院大学」の条件整備としか考えられない。つまり、諸外国からの教授や学生に「米軍が残した PCB」という米軍の汚点を見せたくないというオモイヤリでしかない。

前回の報告で記したように、まだどこでもやってない超臨界水酸化方式での PCB 処理にはリスクはつきもの。恩納村は普通の観光地なので化学コンビナートのような万一の事故に備えたサポートの蓄積もない。さらに、汚職で幹部職員が捕まった「オレガノ株式会社」に施工させる不思議さ。

処理施設が造られようとしている場所は航空自衛隊の恩納分屯基地で、処理水は近くを流れる「大港川」に排水の予定だと言う。恩納村長は排水は流さないことを条件としているようだが、未だかつて「流しません」と防衛施設局は言っていない。

この大港川に隣接する谷茶区はやっと今年度から土地改良が始まった。これまでの土地改良より環境に配慮し、河岸も改修などもせず中南部で一番自然度の高い川として残っているようである。そのため、多くの生き物が生息し、絶滅危惧種もかなりいるようだ。河口には「谷茶メー」と言う歌で知れている谷茶（たんちゃ）の浜が広がっている。

また、基地の北側の「赤間川」は河口の屋嘉田潟原（やかたかたばる）に流れ込む。ここは私たちのフィールドでとても生物多様性に富んだすばらしい所である。恩納岳の豊かな水源と長い歴史を持つ干潟の特性として生物層が厚く、50 ヘクタールという同面積の 5 ヶ所の干潟（奄美大島から西表島）に比べても、貝類だけでもダントツに多く、ほぼ 2 倍の 200 種が確認されている（2000 年「ちゅらさの会」の報告書）。そして、50 ヘクタールの小規模では珍しい環境省の「日本の重要湿地 500」にも選ばれている。このような生物多様性に富む地域を守っていくためにも、また将来の豊かさ保障するためにも、ここで技術の確立されていない PCB 処理をさせないために、たとえ処理されるにしても最大限注意が払ってもらえるように「現状把握の調査」を始めたいと思っている。

米軍基地恩納ポイント跡から PCB が発見された当時は通信施設なのでトランスがたくさんあって、引き揚げるとき浄化槽にぶち空けたのだと思っていた。しかし、それだけではなく日常的に PCB を兵器の洗浄に使っていたふしもあり、沖縄環境ネットワークのメンバーで PCB だけでも早めに調べようと試料を 2 月に採取した。PCB の処理施設が作られそうな恩納分屯基地からも PCB の汚泥が発見されているので、排水の下流の 3 地点で深さ 40 センチから試料を取って検査に出したが、PCB は検出されなかった。

恩納村議会は PCB の村外撤去を 3 度も決議したにも関わらず、村長の受け入れ表明後の反対派は 5 人で 3 分の 1 弱でしかない。説明会も参加者は 10 人程度で、村の日程消化のようである。反対運動を地域で立ち上げようと、何度か数人で話し合いを持つだけでなかなか進まない。それでも、現状把握のために何時でも分析にだせるように、数地点の試料を採取し保管している状況にはある。

沖縄からコスタリカへ ～平和憲法とエコツーリズムの旅～

ツアー日誌（最終回）



インビオパルケの入り口

インビオパルケ（生物多様性のテーマパーク）

IEM(現代教育学院)で昼食をいただき、ツアー最後の訪問地「INBioparque」(インビオパルケ)を訪れる。カリブ海と太平洋に挟まれ、南北アメリカの生物回廊であるコスタリカは、生物多様性に富み、動植物の宝庫といわれる。その自然資源を理解し、保護し、活用するために国立生物多様性研究所 INBio が 1990 年に開所され、地域の補助的な分類学者を数多く養成し、地域の自然保護と生物目録の作成に当たっている。

インビオパルケはそのテーマパークで、1999 年から本格的な営業を始め、コスタリカの典型的な自然を 7ha の敷地に再現している。

最初に 15 分のスライドにより、コスタリカの概況が説明される。その後 2 班に分かれて案内板がある遊歩道を見学する。コースの所どころに展示室があり、ガイドの女性が説明をする。多くの植物が植えられており、鳥や蝶が自然と集まってくるようになっている。

寒冷紗に囲われた蝶園では、ふくろうの顔の様に見える大きな蝶や、鮮やかなパールブルーの羽根を持つ蝶など、珍しい蝶が飛んでいる。通路に放し飼いの鹿が出て来た時には驚いたが、池の周りに多くの鳥が一度に見られ、楽しめる。見たこともない大きな蟻や、肺魚の仲間、蜘蛛のタランチュラや巨大蛇ボアなど、多くの展示室があり、わずか 2 時間の見学ではその一部しか見学できなかった。しかし、多くの写真を撮れたので満足である。

2 班が合流して、総合展示室に入り、コスタリカ全体の自然環境の説明を、場内アナウンスと、電光展示、および壁の写真によって順次追いかける。

今回の我々のツアーが、コスタリカのほんの一部を駆け足で回ったことがよく分かる。世界自然遺産に登録されている、南部には一歩も足を運んでいない。世界的に有名な海亀の海岸にも行きたいものだ。

展示室を出て、30 分ほど付属のお土産売り場で買い物をする。ホテルの側の大きな書店に、コスタリカに関する多くの書物があるが、6 時に閉店するので、ここで本を購入する。

スペイン語の本が多く、やっと英語の本を見つけた。店の外に出て、兼城さんの買った写真集を見る。多くの美しい写真が集められ、コスタリカのすばらしさを再確認する。



インビオパルケの展示

最後の夜のコスタリカ

バスでホテルに戻り、夕食に出かける。寺田さんと照屋さんが、面白い店があるというので付いていく。ホテルと同じブロックで、入り口は 5 間ほど(10 メートル弱)だが、中に入ると奥行きが何倍も長い。派手な音楽と時々聞こえる鳥の鳴き声がかまびすしい。

コスタリカ最後の夜をビールとワインで乾杯する。時々花や CD を売りにくる。奥の席の男性客は、バラを一輪彼女に差し出している。

鹿谷さんと、池宮城さんを合わせて、女性5人と私で3つの料理を注文する。

牛肉と豚肉と魚料理が運ばれてくるが、一見してどれが何なのか分からない。5ミリほどの厚さに焼かれた肉を、豚だと思って食べたら魚だった。どうも料理評論家にはなれないようだ。3人前を6人で食べても量は十分である。

食事の帰りに、池宮城さんがミネラルウォーターを買うので別方向に行き、ホテルの前で彼女が居ないことに気付いた寺田さん。照屋さんが一緒なら襲われないねと一言。確かに、しばらくして華奢な池宮城さんと華奢じゃない照屋さんが帰ってきた。

仕事中毒？

翌日は朝6時に空港で搭乗受付なので、5時にホテルを出発である。今日のうちに荷物の整理をする。コーヒーを8袋持ち帰るので、荷物が増えている。20袋を郵送にしてよかった。大きな旅行カバンなので、十分余裕がある。

また、廊下に出てインターネットをする。通りかかきの白人女性客が、あなたは仕事なのか、と声を掛けてくる。まるで、部屋から追い出された仕事中毒の夫みたいである。そうだと答えたら、肩をすくめて歩いていった。仕事のEメールは無く、ニュースを見る。

イスラエルでパレスチナの宗教指導者ヤシン師がイスラエル軍に殺害され、イスラム原理主義組織ハマスは全面報復を宣言し、民兵組織ヒズボラはレバノン南部からイスラエルにロケット弾を撃ち込み、イスラエルはヘリで反撃している。これからトランジットとはいえ、アメリカに入国するが、これで審査が厳しくなるだろう。どうも、世界は平和的紛争解決からは程遠いようだ。

朝の4時に起床して、4時半にロビーに降りて、チェックアウトをする。まだ、レストランは閉まっているので、朝食は取れない。

またまたトラブル

5時にホテルを出て、6時には空港に到着する。なんと空港は旅行者で一杯である。出国税一人26ドルを支払い、その証明書を持って預ける荷物のチェックである。お土産でパンパンになったスーツケースは、一回点検のために開けると閉まらないものがある。

私が上に乗って締めたり、女性が2人乗って締めたりしている。

ほぼ全員が預け終わり、搭乗しようとするともまたトラブル発生である。なんとヒギンズさんの航空券が無い。

例のロサンジェルス・ドサクサで、受付嬢が帰りの切符を取ってしまったようである。航空会社ではこのような場合、100ドルほどで新たな航空券を発券してくれるシステムがあるが、紛失の事情が分からないので今回は適用されないようである。新たに航空券を購入するとUAでは1000ドル掛かるといわれ、パンナムで聞けば500ドルでダレス経由のロス行きがあった。ロスでは待機期間が7時間あるので、そこでヒギンズさんと合流する。

出発までは1時間あり、お土産店でコスタリカのコーンを使い果たそうと、全員が小物やおやつを買った。例によって、無料の試飲用のコーヒーがあり、最後までコーヒー漬けの毎日であった。

コスタリカ発の段階では客席はガラガラであった。飛び立ってしばらくすると桜井さんが、我々がツアーしたカニョネグロの上空だと知らせてくれた。コスタリカの太平洋側の陸地の上空を北上していく。

グアテマラの空港では、赤絨毯が敷かれ、VIPが入国するようである。女性メンバーの喫煙者はほとんどの場所が禁煙で、あちこち走り回り、喫煙所を探していた。かなりストレスが溜まったようで、ロスでは、切れて八つ当たりしていた。

グアテマラでかなりの人数が乗り込み、後ろの席で隣り合わせた上間さんとラテン系のおばさんが、それぞれの言葉を教えあっている。長い時間をかけやっ通じると、二人で大笑いしている。ここも「イチャレバチョウデイ」(行き会えば皆兄弟)である。

入国審査は思ったほど厳重ではなく、すぐに出口に進んだ。以前にベルトが金属探知機に掛かった女子学生は、最初からベルトをはずして移動している。ズボンがずれると抑えながら急いでいる様はユウモラスである。

ロスでリトルトーキョウに

ロスでは6番ターミナルビルに到着し、台北へ出発のチャイナ航空は4番ターミナルの未だ先の辺鄙な場所にある。歩いて場所を確認してから、緒方さんとロスに出る。

リトルトーキョウにある全米日系人博物館を見学する。20世紀の当初からアメリカに移住した日系人は、故無き差別に苦しみ、はては12万人ものアメリカ本国の日系人が強制収容所に入れられた。その歴史を文献・映像・口述記録で保存されている。丁度イサム・ノグチの展示会を開催しており、そのユニークな陶芸品の数々を見物できた。

リトルトーキョウモールで、沖縄出身の新垣菊さんが店主をやっている沖縄物産店を見学した。毎月沖縄から

仕入れてロスの沖縄人の集まる場所にしたいそうである。未だ、開店一週間で、知名度が低く、沖縄料理の店と間違える人も居るそうである。

少し歩いて日本料理の hama-sushi に食事に行った。アボガド寿司やえびフライ寿司等の変わり寿司を食べた。初めてだが、結構美味しかった。ビールを飲み、3人で40ドル。4000円ばかりで楽しめた。日本より安いのは。

食事が終わり、ホテルニューオータニにコスタリカにも縁がある伊藤千尋さんに会いに行った。途中、交差点にある二宮金次郎の像の碑文も笹川良一だと聞かされた。しかし、さすがに日系人が苦勞したこの町では、戦争犯罪人の碑文ははがされているそうである。

ラッキー、アンラッキー



ロス空港の夜景

ターミナルに戻り、待合でヒギンズさんと合流。最後の長旅、台北への14時間のフライトである。

座席はフライトアテンダントの前の広々とした特等席である。足が伸ばせて身体も動かせる。ラッキー。

しかし、シートベルト着用が解除されると、状況は一変。中華航空は台湾の乗客が多い。これ当たり前。なぜかトイレ使用時に鍵を掛けない。空いているか確認しないで無理にドアを開けようとする。その度にトラブルが起る。開け方が分からない人もいる。私のすぐ前なので、その都度調整に行く。中でチャンと事を済ませているか心配だが、そこまでは面倒は見ない。終わるとこちらに合図を送って笑っている。こちらも会釈を返す。これではトイレ奉行。アンラッキー。

台北に着くと、言葉は通じないが人種が近いので、帰ってきたという感じになる。朝が早すぎて店員もターミナル職員もいない。しばらく時間調整をして、待合に移動する。そこでツアーの感想会を持つ。一人一分の一口感想ではあるが、全員強烈なインパクトを受けた旅だったことが分かる。

感想会が終わり、少し時間があるので、ターミナルの店で朝食に中華風牛丼を食べる。卵でとじない分だけ、サラッとしている。日本では米国のBSE(狂牛病)の影響で牛丼がメニューから消えている。

待合に戻ると直ぐに搭乗が始まった。1時間少しの短い那覇までのフライトで朝食が出た。もったいないから又食べてしまう自分が情けない。最後まで過食の旅でもあった。

私を挟んで、妻と池宮城淳美さんが熱く語っている。スペイン語の勉強をして、再びコスタリカを訪ねよう。沖縄コスタリカ協会を作ろう。集めた資料を有効活用しよう。等々。後で桜井さんから聞いたところによると、学生たちも同じように、しばらく燃えっぱなしだそうだ。自ら勉強しようとする意欲を強く持つことはすばらしい。

那覇空港に到着し、ターミナルを出たとたん、空気が体に巻きついてくる。重い、ねっとりとした湿気の多い沖縄の空気。わずか10日間で体の感覚は観光客になっている。コスタリカの温度が15度で、湿気がなく、つねに風が吹く常春の気候で、一気に常夏の沖縄についていけない。

翌日の仕事では、暑いのでかりゆしウエアを着て総合事務局に行き、知り合いの営業マンから、今日は比較的寒い日です。かりゆしウエアは早すぎますよ、と驚かれた。身体まで燃えている。

締めて一人20万円、10日間の特別ツアーであった。31人が一つの家族のようにまとまった、すばらしい旅行であった。その後会う度に、しばらくは全員が熱に浮かされたようにコスタリカの話をしていた。行ったばかりなのに直ぐにまた訪れたい。(内海 正三)

※ 5回に渡って本通信に連載されたこの「コスタリカ日誌」が単行本になりました。カラー写真満載の美しい本です。沖縄県内は有名書店にて発売中。県外の方や書店にない方は、事務局(098-832-8484)までご連絡下さい。ご郵送します。



